

NURSE LETTER 1

新年特集 & ナースレター第100号 発行記念特大号



明けましておめでとう御座います 看護部長 横田育代

衝撃を与えた、3.11 東日本大震災から 10ヶ月が過ぎようとしています。現地より 1200Km 離れた愛媛の地においても、災害が与えた影響は大きかったこと、昨日のように思いだされます。又、家族、職場、地域との連携がいかに大切か、思い知らされた時でもありました。12月に発表された漢字は「絆」です。思い起こせば、当院でも連続2年、病棟閉鎖を行い、その年機能評価Vo16受審等、皆が手を取って、不安や困難や苦難を乗り越えてきました。全職員の連携の強さが、何よりも心強かった事を思い出します。当院看護部の「絆」を深め、「隣りの人の温もり」を感じながら、看護に邁進して頂けたらと思います。

又、2002年7月にスタートしたナースレターは今回で100号の発刊を迎えます。皆さんのその時々での活躍や所感を拝見し、当院看護部の歴史の中の「絆」を感じております。10年間続ける事は、先人を含め、関係諸姉のなみなみなならぬ努力であると感じ入り、感謝致します。今後も看護部の情報誌として、継続し続けて頂けたらと希望します。

初代編集長 泉師長からの message



2012
Dragon Year

A Happy New Year

継続は力なり。粛々と続けて100号を迎えられたことを嬉しく思います。2002年の7月、Nurse Letterと名付けられた看護部の機関誌は産声を上げました。この年は名称が看護婦から看護師へと変わった年です。当院の看護部も色々な意味で変革をした年であったように思います。

創刊にあたり Nurse Letter のロゴのデザインには苦勞した記憶があります。レイアウトや文字の並び、題名のデザインなど本物の新聞を見て四苦八苦しました。当時師長をしておられた越智さんから毎月「宮子のちょっと一句」を頂き、季節感を添えることができました。37号から岡本師長・山内補佐が、46号から山内補佐と鹿谷補佐が手伝って下さるようになりレイアウトなどを一新できたと思います。81号まで色々な方に原稿を寄せて頂き今さらながら本当に感謝しております。当院看護部の足跡を少しでも残せていると感じて頂けたら嬉しいです。

今後も看護情報管理委員の方々の斬新な Nurse Letter を楽しみにしています。
泉 敦子

振り返ってみました

創刊号には「看護部の活動状況など随時お知らせするために」と創刊の目的が記入されています。院内研修やTQM活動など看護部の活動に焦点を当てた内容が多く掲載されていましたが、新たな知識の情報発信としての側面を加え、学会報告などが多く掲載されるようになりました。泉師長から引き継ぎ、2009年4月より編集は情報管理委員が行い100号を迎えることが出来ました。

100号発行を記念して、今後のナースレターをより充実するためにアンケートを実施します。ご協力をよろしくお願い致します。皆様の意見を反映して、より興味が持てる内容で編集したいと思います。

NURSE LETTER 1

院外研修から

看護の質を高めるための看護記録

北4病棟 西原 恵
看護記録の法的な背景や役割について講義を受け、電子カルテの現状や課題についても知ることができました。院内教育や医療安全の観点からのグループワークでは、医療者側と患者側に分かれて模擬カルテ開示を行いました。事例の看護記録を基にした開示でしたが、記録から、その当時の状況を読み取ることが難しく説明を求められても戸惑いの方が大きく、上手く答えることができませんでした。反対に家族側になると記録の細かい部分が目に付いたり、実際にどんな看護がされたか分からないという印象でした。

研修中「**看護しても記録がなければやってないのと同じ**」と何回となく言われました。看護したことを全て記載するのは限界があります。看護記録が色々な場面で重要な役割を担っている事を再認識した今、**ガイドラインに沿った記録を日々行うことが大切だ**と感じました。

院内研修から

伝達講習会で得られたもの

教育委員長 高橋 美保

今年度、1回目の労働者健康福祉機構主催集合研修及び日本看護学会参加者による伝達講習会が開かれました。機構主催の研修会は、管理者、新人看護職教育担当者、認定看護師、中堅看護師…など、その役割に応じた知識を得られる内容になっていると共に私たちが所属する機構の動向を知ることができる貴重な機会となっています。今回、機構主催研修参加者からは、医療安全や看護倫理、勤労者看護についてなど、私たちが看護を行っている中で認識しておくべき内容や労災病院に求められている役割に関する内容が具体例と共に伝達されました。また日本看護学会については、その伝達内容を通して、未曾有の大災害に見舞われた日本における看護の力の素晴らしさを知ることができました。

日本看護協会は、今年度より公益社団法人として新たな一歩を踏み出しました。また、学会委員会では、日本看護学会における専門領域を実践の枠組みを軸として見直しています。このように、**私たちを取り巻く環境は常に変化しています**。その変化に乗り遅れないよう情報をキャッチし、皆で共有するために、今後も伝達講習会を継続していきます。**皆さん、是非、学会や研修会に参加しましょう。**

認知症患者看護研修に参加して

南4病棟 田坂 美幸

松山で開催された『認知症患者のよりよい看護を行うために』というテーマの研修に参加しました。認知症患者は、現在 200 万人存在すると推測されています。最近では、若年性認知症が 10 万人に 59 人発症しているそうです。認知症患者の有病率が高くなるとともに認知症ケアの充実が、今後の大きな課題です。

認知症にはいくつかの種類があり、それぞれによって症状やケアの押さえどころが異なります。例えばピック病患者は、状況に関係なく同じコースを廻るという周回がみられます。アルツハイマー病の患者は、目的を忘れ空間認知が悪くなり元に戻れなくなり徘徊してしまいます。個々の疾患に合わせた知識と対応がポイントになり、病気のステージや症状に合わせたケアが必要であると考えさせられました。

今回の研修で**認知症患者の看護の基礎となるのは、「知識」「関わる姿勢」「困難を解決する工夫」**だと再認識しました。一人の人としての尊厳が守られるように今後も、より一層認知症患者のケアに関心を持ち、その人を「大切に思う」心で看護していきたいと思えます。

看護を語ろう

4 人の発表者がそれぞれの立場から、様々な経験を踏まえた看護を語りました。看護を話そうとすると、自分の根っことなる「命」「生・死」に対する捉え方と向き合い、死生観に基づいた看護観を言葉にする必要があります。自分の看護観をしっかりと持つことで、患者を一人の人間として尊重し、心を支える看護ができるのかもしれませんが、「**看護を語ろう**」の研修は、**研修後アンケートでも好評です。次年度も開催されることが決定しています。10 人の看護師がいれば 10 通りの看護があります。来年は「私の看護をみんなに語りたい」という方は、看護の質向上委員または、病棟師長に言ってください。**

言葉や看護は、受け取る側の捉え方によって善くも悪くもなります。**信頼関係を構築し、ケアしケアされる関係を築き、日々学ぶ必要があると感じました。**



寒くなりカーディガンを着用する機会が増えてきていると思います。**カーディガンは規定の色**を着用していますか？もう一度ポスターをよく見て見直してください。

ナースステーション内での私語も引き続き注意しましょう。